

# 日本社会心理学会会報

204号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル 同志社大学社会学部 池田研究室

2014年12月24日

## 第58回公開シンポジウム 「カルト問題とマインド・コントロール論再考」

日本社会心理学会と日本脱カルト協会の共催となった今年度の公開シンポジウムについて、開催報告と参加記をいただきました。研究者として、あるいは教育に携わる者としても、カルトとマインド・コントロールが未だに根深い社会問題であることをよく知っておく必要があるのではないのでしょうか。

### 第58回公開シンポジウム 開催報告

渡辺浪二

第58回公開シンポジウムはフェリス女学院大学緑園キャンパスで、11月22日(土)、初の試みである日本脱カルト協会との共催という形で開催されました。参加者は180人ほどと、おそらくこれまでにない多数の参加者を得ることができ、これも日本脱カルト協会との共催の相乗効果によるものではないかと思われまます。このことを表すものとして、参加者は日本社会心理学会員のみならず、大学の近辺の市民の方、そして日本脱カルト協会会員の方と多様でした。もちろん、問題あるカルト団体の方々、宗教団体の信者の方々も多数参加されておりましたが、マスコミからも共同通信社一社ですが取材申し込みがありました。

今回の企画は開催通知にも記しましたが、カルト問題に対する危機感からです。オウム真理教のサリン事件からほぼ20年近い歳月が経過し、カルト問題は終息し、過去の物語であるかのように語られております。そして、今日大学に入学する学生は、サリン事件以後に誕生した世代になり、オウム事件は忘れ去られようとしています。しかし、あろうことか今日においても、オウム真理教の教えを維持する宗教団体をはじめとして、問題ある宗教団体に入信する若者は絶えません。メディアによってオウム真理教の事件に関わった関係者の裁判が現実に行進しながら、この現実です。

このような現代において、カルト問題とその解明に寄与してきたマインド・コントロール論を、改めて考えてみることは意味があるものと考えました。カルト集団も変容してきていますが、一方のマインド・コントロール論も当初の概念からさらなる発展を遂げてきました。

今回のシンポジウムが、二つの団体の共催という形式を取ったのは、学術的、理論的な枠組みにとらわれることなく、すぐれて社会的象徴である問題への関心を高め、その対策まで積極的に迫ることにありました。もちろん、学術的なマインド・コントロール論をさらに精緻化させることも狙いがありました。

このような企画ですので、理論と実践を兼ね備えた研究者がシンポジストには最適と思われました。そこで、話題提供者には、カルトにかかわる社会問題に詳しい弁護士で、かつ社会心理学会

員でもある紀藤正樹氏(リンク総合法律事務所)、マインド・コントロール理論の第一人者であり日本脱カルト協会の理事長でもある西田公昭氏(立正大学)、大阪大学でカルトの予防教育の実践を行ってきた太刀掛俊之氏(現・岡山大学)の三氏にお願いしました。指定討論は、マインド・コントロール論の構築に当初から関わってきた安藤清志氏(東洋大学)にお引き受けいただきました。

当日は村田光二会長(一橋大学)からご挨拶をいただき、司会者より企画説明、シンポジスト紹介の後、最初に紀藤正樹氏から『マインド・コントロール』と『カルト』問題—免疫力のある社会に向けて—というテーマでお話いただきました。紀藤氏はご自身が係争中のホーム・オブ・ハートに関する事例から始まり、近年そこから脱会したミュージシャンの書籍に触れ、そこで行われたマインド・コントロールの技法や脱会の経緯などについても報告されました。さらに、統一教会の勧誘手法等について、マインド・コントロールなど存在しないというカルト団体側の批判については、多くの裁判においてマインド・コントロールの存在が認められ、その違法性は明らかであるとの見解が示されました。

引き続いて、西田公昭氏からは、「一般にも社会心理学者にも知って欲しいカルトとマインド・コントロールの知識」というテーマで、当初のマインド・コントロールの定義に目的の悪意性を加えるとともに、最近では「心理操作: psychological manipulation」という概念でとらえ方がより適切である、との見解が述べられました。その後、マインド・コントロールはないという一部の見解

#### ● 今号の主な内容

- 【1面】第58回公開シンポジウム(開催報告・参加記: 渡辺浪二、小森めぐみ)
- 【3面】日本社会心理学会 第2回春の方法論セミナー
- 【5面】研究会紹介: 社会行動研究会(佐藤重隆)
- 【5面】若手会員、声をあげる(塚本早織、小川祐樹)
- 【7面】役員選挙終わる
- 【7面】会員異動

に対して、心理学的立場から紀藤氏と同様反論を唱え、「勧誘—教化—維持」という3つのプロセスに渡って明確にマインド・コントロールの手法が用いられていることを明らかにしました。最後に、マインド・コントロールの技法が人々の人権を侵害するばかりでなく、テロリズムのような危険な行動を生み出す源泉になるとの警鐘が発せられました。

次いで、太刀掛俊之氏からは「大学におけるカルト問題と予防教育の実践」というテーマで、大阪大学で行われている、極めて実践的なカルトへの予防教育の報告がありました。大阪大学では全学生必修授業『大学生生活環境論』を設け、カルトやマインド・コントロールの座学的な講義にとどまらず、勧誘に対する抵抗力を高めるロールプレイまで行っているとの事でした。また、被勧誘体験で被害を受けた経験のある学生は、人文系よりも理工学系に多いという興味深い数字もあげられ、最後に、大学におけるカルト問題へのスタンスは注意喚起をすればよいというものではなく、予防教育に努めるという社会的責務を認識しなければならないとの見解を述べられました。ここで、休憩に入り、会場からの質問を書きいただき、回収しました。

休憩後に、指定討論者の安藤清志氏からカルト問題の理解にとって大きな影響をもたらした「影響力の武器」の発刊前後の経緯が紹介され、学会におけるマインド・コントロールに関するイベントは、1996年日本心理学会第60回大会から今回の公開シンポジウムまで、ワークショップ等を含めると7回開会されているとのことでした。この間、一見カルト問題とマインド・コントロール論への関心は薄れてきたようにも見えるが、カルト問題への対策は広がりを見せている一方、カルト側の働きかけは対象が大学生から高校生へと広がり、コミュニケーション手段の変化に伴い、勧誘の手法もそれに応じた拡大をみせしていると分析されました。そして、マインド・コントロール理論を用いることによって、勧誘における心理操作の存在(入り口)とそのことへの気づき(出口)をもたらすことの有効性を強調されました(たが、一方でカルトからの脱会者の方々への偏見を助長する危険性があることも指摘されました)。最後に、幻想の彼方へ惹かれる若者を増やさないための教育・対応の重要性を述べられました。

その後、短い時間ではありますが、会場からいただいた質問にシンポジストの方からお答えを頂きました。

最後に企画・司会者の渡辺が、当初のマインド・コントロール論からすれば格段の精緻化がなされたとの感想が述べられ、まとめとして指定討論の安藤清志氏の指摘にあった2つの要素「カルト問題の知識を高めること」、そして「勧誘への抵抗のスキルを磨くこと」が重要であるという言葉をそのまま頂き、これこそがカルト問題への予防と防衛策であることを強調し、無事シンポジウムを終えることができました。

今回のシンポジウムを開催するにあたり、学会企画担当の相川充先生、広報担当の三浦麻子先生には大変お世話になりました。また、共催ということで、日本脱カルト協会の山口事務局長、滝本太郎前事務局長、そしてシンポジウム当日には脱カルト協会の多くの会員の方々にも会場運営の面でお世話になりました。ここに記して感謝いたします。

(わたなべなみじ・フェリス女学院大学)

## シンポジウム参加記

小森めぐみ

平成26年11月22日にフェリス女学院大学にて行われたシンポジウムに参加しました。会場は大学生らしき若者から高齢の方、お子さんを連れのお母さんなど多くの人たちでごった返しており、座席を詰めて座らなければならないほどでした。質問は先生方の話題提供後に紙に記入して提出するという形式をとっていましたが、休憩後に戻っていらした先生方の手にはたくさんの質問用紙が。参加者の関心の高さが伺えました。

私が大阪からの参加を決めた理由は様々です。担当している犯罪心理学の授業でカルトを扱う予定だったというのもありますし、発表タイトルに含まれた「社会心理学者にも知ってほしい」という文言が印象に残ったこともあります。何より、私が地下鉄サリン事件当時被害にあった路線を通学を利用する学生であったということが、この問題に関心を抱ききっかけとなっていたように思います。事件から20年を経て人の心を専門的に研究する身となった今、あらためてこの問題をふりかえってみようと考えました。

しかし、私の感傷的な関心はある意味ではずれなものでした。ご発表の中で紹介された大学関係者に対する調査(N=730校、回収率53.6%)では、返信のあった大学の40.4%(108校)に現在でもカルトが関わる問題があったとのことでした。これが返信のあった大学で把握できているだけの数に過ぎないことはいうまでもありません。また、多くの方がご存知の通り、カルトのマインド・コントロールには社会心理学の知見で説明可能なものが多くありましたが、それは今でも変わっていないのです。シンポジウムへの参加はマインド・コントロールに関する最新の情報を得る場となったと同時に、研究者として、そして社会心理学の教員としての自分のこれからの姿勢を改めて考える機会となりました。

紀藤先生はカルト問題を巡る裁判の動向や裁判におけるマインド・コントロールの扱いについて、豊富で具体的な経験を提供して下さいました。司法の場ではかつてマインド・コントロールの存在が疑問視されることもあったそうなのですが、関係する方たちのご尽力があつて、今ではマインド・コントロールが人々の思考や行動に実際に影響を及ぼすものとして認められているそうです。ご発表の中にくりかえし登場した裁判の判例文が印象に残っています。そこでは、心理学や精神医学の知見の濫用が「血の通った人間のすることではない」と表現されていたのです。心理学が明らかにしてきた様々な知見が人々の思考や行動に及ぼす影響力の強さをあらためて実感しました。

西田先生は多くの研究に裏打ちされたモデルやマインド・コントロールのプロセスについての最新の研究動向を教えてください、この問題の全体像と広がりを見せて下さいました。その中で、学術的な知見と現場での指摘をふまえ、マインド・コントロールを「極端さと手法の多様性をもった、集団による心理的な虐待」として再定義しておられました。このことは指定討論の安藤先生も強調されていました。マインド・コントロールが単なる対人的影響と違うところは、より効果的な環境の中で数多くの要因を組み合わせ、強力かつ頻繁に働きかけて重大な結果を引き起こすとい

うことにあるのです(傍点は筆者による)。

私はこのお話を聞いて、マインド・コントロールのアプローチは学者の行う研究とはある意味では逆であると思いました。研究者が実験をするときには、因果関係を明確にするために同じ影響をもたらす要因を複数重ねることは控えますし、極端なはたらきかけは倫理上問題があるとされて扱えない側面があります。マインド・コントロールの場ではこれらが積極的に行われているということになります。このように考えると、マインド・コントロールの場で起きていることは、社会心理学者に自分たちでは調べようのない複数の影響過程の相互作用や強い操作の効果についての情報を提供する可能性があります。マインド・コントロールについて知ることは、自分の研究を多角的にとらえるという点においても重要な意味をもつでしょう。もちろん情報を得るだけでなく、虐待の犠牲になった方々への対応や予防策を専門的な立場から考えることの重要性が高いことはいまでもありません。

太刀掛先生は大学キャンパスにおけるカルト問題の実像と予防教育の実践例をご紹介下さり、カルトの手口に関する情報だけでなく、実践的スキルを身に着けることの重要性を教えてくださいました。サークルを騙ったカルトは学外に拠点があり、名前や組織沿革、活動内容が曖昧などの特徴をもち、学生が一人にいるときに勧誘を行いやすいそうです。ただし、これらの特徴を巧妙に偽装したり、チラシを配布すると証拠となってしまうので見せるだけにしたり、SNSを使って学外接触を試みるなど、近年の勧誘活動は手口も凝ったものに変化しているそうです。こういった具体的な情報は大学関係者として有用性の高いものでした。何より、最近は高校生にまで勧誘の手が伸びているという話におどろきました。私の勤務校では高校への出張授業の機会がありますが、次の機会にこういった話をして、高校生に実状を聞いてみたいと思いました。

先生方のお話を伺い、改めて当時のことを思い出すと、地下鉄

サリン事件は私のような直接の関係者でない者にも様々な影響を及ぼしたように思います。事件が起きてからしばらくの間、私はテレビやスポーツ新聞の見出し、友だちの噂に翻弄され続けていました。事件が起きた後に再び地下鉄で通学するときに、地下鉄を使っても大丈夫な理由をたくさん考えて友人と言い合いました。何度か報道された次の事件の X デーに内心ビクビクしつつも、親に「出かけないように」と言われると突然好奇心を抱いてこっそり新宿駅をうろうろと歩き回ったりしました。そうした自分の行動もマインド・コントロール問題と同様に、社会心理学で説明可能なものだったように思います。

20年の時間の経過は私の中にあつた当時の不安や混乱を薄めていきました。しかしこのシンポジウムに参加することで、この不安や混乱の弱まりもまた、私たちの心のもつ仕組みのなせるわざにすぎないこと、マインド・コントロールの問題自体は変わらず「いま、ここにある危機」なのだということに気づくことができました。安藤先生はカルト問題に限らないマインド・コントロール問題に対する大学の対応として、手口に関する具体的知識の提供、なぜ動かされるかに関する心理学知識の提供、スキルの訓練を挙げ、レジリエント・キャンパスを目指すことの重要性を指摘しておられました。司会の渡辺先生もキャンパスをこえた個々人の対応策として、知識とスキルの両方を身に着けることを推奨しておられました。私も専門的な知識を提供する立場として責任感を抱きつつ、人間行動の更なる理解に少しでも貢献できるよう、毎日の教育・研究活動にまい進したいと思います。そして、その中でなんとか自分のスキルも高めていけたらと思います。

(こもりめぐみ・四天王寺大学)

次回(第59回)公開シンポジウムは、福島大学の飛田操先生をオーガナイザーとして2015年6月6日(土)に福島市で開催されます。会報次号で企画詳細をお届けする予定です。

\*\*\*\*\*

## 日本社会心理学会 第2回春の方法論セミナー 「GLMMが切り開く新たな統計の世界」

昨年度大好評だった第1回に続いて、第2回春の方法論セミナーが下記のとおり開催されます。今回も新規事業委員会から意気込みあふれる「前説」が寄せられましたので、どうぞ熟読の上、ふるってご参加ください。なお、今回もオンライン中継と動画公開を予定しております。詳細はメール・ニュースでお知らせします。

日時	2015年3月25日(水) 13時~17時(12時半開場予定)
会場	上智大学四ツ谷キャンパス 3号館5階521教室
参加費	無料(事前予約不要; 会員以外の参加も可)
企画	日本社会心理学会新規事業委員会
司会	脇本竜太郎(明治大学)
講師	竹澤正哲(北海道大学) -なぜいま GLMM か 久保拓弥(北海道大学) -GLMM の紹介 清水裕士(広島大学) -社会心理と GLMM の関係

## セミナーの目的

新規事業委員会では、第2回春の方法論セミナーにおいて、一般化線形混合モデル (Generalized Linear Mixed Model; GLMM) を紹介する。前回のテーマであった再現可能性は、実証研究者であるならば誰もが直面する重大な問題である。それと比べれば、今回は「新たな統計解析ツールのひとつ」を紹介する、ごくありふれた統計セミナーに過ぎないと感じられるかもしれない。

今回のセミナーの目的は「新しい道具の一つ」を紹介し、その使い方を知ってもらうことではない。実際、参加者にノートPCを持参してもらい、一緒に分析をする予定はない。統計を利用する者の教養として、社会心理学の外で胎動する新たな潮流、新しい世界の片鱗を知ってもらうことが、最大の目的である。だが、こうした抽象的な言葉を並べても、セミナーに参加する価値があるのか、ピンと来ない方も多いだろう。学会ウェブサイトでは、なぜGLMMが大きな注目を集めているのか、その理由をいくつか紹介したが、本稿ではさらに別の角度から、なぜこの統計モデルを知ることが重要なのか解説したい。

## GLMMの威力

我々は説明変数と被説明変数の関係を調べるために分散分析や重回帰分析など多くの分析ツールを使い分けている。だが我々が使い慣れた道具では分析が困難なデータが数多く存在する。

例として、被説明変数が二値型で、1人の参加者から条件を変えて繰り返し測定されたデータを考えよう。ロジスティック回帰を使えば良いだけのように見えるが、分散分析の場合とは異なり、通常のロジスティック回帰では反復測定されたデータを分析できない。これは一例に過ぎない。階層構造を持つ多項ロジット回帰、反復測定のある対数線形分析など。我々が使い慣れた道具では分析が困難なデータは数多い。

GLMMは、確率分布とリンク関数という概念を導入することにより、被説明変数がどのような形式 (e.g., 連続、二値、カテゴリカル、カウント) であっても、フレキシブルに分析できる。また変量効果という概念を導入することで、反復測定されたデータであっても、階層構造があっても、ネストされていても、全てのケースについて分析が可能となる。たとえば、階層構造を持つ反復測定ロジスティック回帰ですら、GLMMを使えば容易に分析可能となる。つまり、GLMMとは説明変数と被説明変数の関係を解析する多くのツールの最上位に位置する、もっとも包括的な統計モデルなのである。これこそGLMMが注目を集める最大の理由と言って良いだろう。

## 手持ちのツールにデータを合わせることの危険性

使い慣れた道具では正しく分析できないデータがある時、データに合わせて新しい道具を調達するのではなく、データや実験デザインの方を加工することがしばしば行われる。重回帰分析や分散分析など使い慣れた道具を利用するために、本来ならば二値/カテゴリカルで測定すべき現象をあえて連続変量として測定することもある。反復測定されたデータに対して、参加者毎に平均値を求めて、使い慣れたツールで分析できるようにデータを加工することもある。

次のように考える人もいるかもしれない。それで何が悪いのか、と。確かに「論理的には間違っている」かもしれない。だが、多少間違っているでも分析の結果など大きく変わらないのではない

か? GLMMなどという複雑な統計モデルを使っても、結局は、手に馴染んだ古い道具を使った時と同じような結果が得られるだけではないか?

だがこれは大きな誤りである。我々が用いる分析道具は、統計的な独立性の破れに対して脆弱であるし、データを加工することが思いもよらぬ結果を招くこともある。特に後者の営みがもたらす危険性については、[夏合宿セミナー](#)に講師として参加していただいた村山・榊両氏による論文 (Murayama, Sakaki, Yan, & Smith, 2014) にヴィヴィッドに描き出されている。メタ認知研究では、複数の項目を用いて参加者のメタ認知能力を測定した後、参加者毎に平均値を求めて分析されることが多い (by-participant analysis)。手続き上、何の問題もないように思われるだろう。だが、村山・榊両氏の研究によれば、このような分析は第一種の過誤の確率を増大させる。そのため、データを加工して参加者毎に平均値を求めるのではなく、項目のばらつきを残したまま変量効果として分析しなければならない。これが2014年に *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* という一流誌に掲載された論文であることから明らかなように、この問題の所在はあまり知られていないと言って良いだろう。

GLMMは、従来のツールでは分析困難なデータ構造を変量効果という形で、容易にモデルに組み込んで分析できる。また、確率分布という概念から出発するため、変数が連続変量、二値型、カテゴリカル、カウントデータのいずれの場合でも、どのような分布でも分析できる。統計モデルに合わせてデータを無理に加工する必要がなく、測定されたデータを自然な形で分析することのメリットは想像以上に大きい。

## なぜ今GLMMか

統計的手法はあくまでも道具に過ぎない。実証研究において最も重要なのは、理論や実験デザインの方であろう。また統計の世界では、日々新しい手法が開発される。それらを全てフォローしていたのでは、肝心の研究がおろそかになり、ただの統計オタクになってしまうかもしれない。多くの人びとにとっては、今すぐにGLMMを使い始める必要はないだろうし、またGLMMを使うようになったからといっても、これまでに使い慣れてきた道具を捨て去る必要もないだろう。

だが、GLMMを知ることは、他の分野の最新の研究成果を理解するために、今後必ず必要となるものである。また、自ら利用しなくとも、GLMMの考え方を得ることで、既存の統計手法についての体系的な理解が得られるという大きなメリットもある。

我々がGLMMを今回の春の方法論セミナーで取り上げることにしたのは、決して、ごく一部の統計好きな人々に喜んでもらうためではない。GLMMが注目されている理由、GLMMが利用されるべき理由を知ることが、データ分析という営みに携わる上で、重要な意味を持つと信じるからである。多くの人びとに参加していただければ幸いである。

Murayama, K., Sakaki, M., Yan, V. X., & Smith, G. M. (2014). Type-1 error inflation in the traditional by-participant analysis to metamemory accuracy: A generalized mixed-effects model perspective. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, 40(5), 1287-1306.

## 研究会紹介: 社会行動研究会

全国各地で開催されている研究会めぐりの旅。今回は社会行動研究会のご紹介をお願いしました。「しゃこうけん」は創始以来 30 年以上、誰もがよく知る翻訳書をものされた伝統ある研究会が最近では活きのよい若手の腕試しの場として復活し、議論と社交の機会を重ねておられます。

### 社会行動研究会のご紹介

佐藤重隆

社会行動研究会（以下、社行研）は、東洋大学を会場とする、隔月開催の研究会です。定例会の参加者はおよそ 30 名程度で、その 4 割は大学院生です。大学関係者以外にも、企業や研究所・官公庁に勤務する方など多様なメンバーが参加し、広く交流する場となっています。研究会の活性化のため、若手の参加をおおいに歓迎します。

定例会での発表テーマは特に指定されていません。スピーカーが「いま一番興味関心をもっていること」を自由にお話いただいています。これまでの発表では、社会心理学を中心に、幅広い領域のテーマが取り上げられてきました。例えば、2014 年度中には、犯罪心理学や神経科学などに関するご発表もありました。各回の発表者は 1~3 名です。発表者のご希望にあわせて発表時間の設定をしていますが、基本的に発表時間 60 分+質疑応答 30 分というパターンが多くなっています。毎回、活発な意見交換が行われ、質疑の時間内に収まらないこともあります。休憩時間や懇親会でも、発表者を囲んで大いに議論が盛り上がっています。参加者は関東圏の方が多くですが、関西などの遠方からスピーカーをお招きすることもあります。

社行研はメンバーの交流を大切にしています。「しゃこう」研という愛称は「社交」を意味すると噂されるほどです。休憩時間にはソフトドリンクと菓子を囲んで和やかな会話を楽しみ、懇親会ではさらにアルコールも入って「飲みニュケーション」に花が咲きます。発表者の誕生日を祝うサプライズパーティが開かれたこともあるほど、温かな雰囲気のある会です。社行研の懇親会では、懇親会参加を促進するために若手研究者が参加しやすい会費設定を行っていますので、研究会に参加された際には是非懇親会にもお越しただければ幸いです。

この研究会は、1982 年に末永俊郎先生が東京大学文学部を退官されるのを機会に結成されました。第 1 回は東京大学教養学部心理学研



究室で行われました。研究会の活動と並行して、研究会に参加するメンバー中心となり出版や「プロパガンダ・広告・政治宣伝のからくりを見抜く」や先ごろ第 3 版が発売された「影響力の武器」の翻訳を行って来ました。20 年以上行われてきた社行研でしたが、2008 年以降は休眠状態になっていました。しかし、2014 年から再開され、再開 1 回目には山岸俊男先生にご登壇いただきました。また、昨夏は特別企画としてマルチレベルモデリング講習会を開催し 150 名近くの参加がありました。

今後の開催予定ですが、2015 年 2 月に 169 回目の社行研を予定しています。参加への事前登録は不要です。参加を希望する方は、会場に直接お越しください（ただし例外的に、参加人数の制約などの事情により、事前登録をお願いすることもあります）。

開催情報のお知らせは、ホームページまたは社会心理学会のメール・ニュース等でお知らせしています。ホームページでは最新会のご案内や再開後の発表概要に関するアーカイブがありますので、SNS 等での情報拡散に活用していただければ幸いです。メーリングリストもあり、180 名ほど登録をいただいています。幹事一同、皆様のご参加を心からお待ちしております。

（さとうしげたか・東洋大学）

\*\*\*\*\*

## 若手会員、声をあげる

今回はアメリカ留学中の塚本さんと、工学と社会心理学の協働を実現している小川さんからご寄稿をいただきました。いずれも楽しく精力的に研究に励んでおられる様子がよく分かる内容です。かれらにオフライン/オンラインで出会ったら、是非「会報見たよ」と声をかけて下れば幸いです。

### 海外生活のススメ

塚本早織

サバイバル生活。葉っぱで作った寝床、食べられるか判らないキノコ、敵か味方かわからない人に出会う…。サバイバル生活は

不自由さの塊だ。海外での研究生活は、大げさに言うとサバイバル生活に想像されるような不自由さで形容できると思っている。言語や習慣の違いが壁となるコミュニケーションは野性的な勘で乗り切るしかないし、必要な情報は一から自分の足で探さなけ



ればいけない。海外での研究生活は非常に不自由で居心地が悪い。私は今、アメリカのプリンストン大学で、そのサバイバル生活の真っ只中である。

「塚本にはサバイバル能力があるよね (i.e.,

サバイバル能力しかないよね)」と何度か言われたことがある。もちろん、ジャングルで生きていける力ではなく、海外の研究機関で比較的ハッピーに研究できる楽観性のことを指しているのだが。何度かに渡る海外生活の経験で培ったと思われる、そのサバイバル能力という唯一の武器を使い、私はこれまでオーストラリアとアメリカで研究を行う機会に恵まれてきた。お世話になってきた主な先生は、Melbourne 大学の Nick Haslam 先生、Yoshi Kashima 先生、その当時ニューヨークで研究されていたイタリア Padova 大学の Anne Maass 先生、そして現在は Princeton 大学の Susan Fiske 先生である。サバイバルと割り切って、その不自由さと居心地の悪さを楽しむ少しの勇気と大胆さがあれば、海外の研究機関で研究を進めることができるのだ。私はここで、海外の研究機関で研究を行うことで得られる3つのメリットを個人的経験から述べさせてもらう。

まず、自分の研究のためになる。先に書いた海外生活における居心地の悪さは、日本では味わえない。偏見のメカニズムやステレオタイプを研究の課題としている私にとって、マイノリティーの視点に立った経験は重要である。海外では自分の社会的カテゴリーを実感し、マイノリティーであるという社会的な居心地の悪さを経験する機会が格段に増える。例えば、「日本ではどうなの」とか「日本人って…」などと言われ続けると、「日本代表」でないはずの自分は正直疲れてしまう。また、人種差別や社会的階層についてメディアでも議論されることの多いアメリカにいと、自分の社会的カテゴリーの非優位性を否が応でも考えてしまう。「白人は偉そう」な気がするし、「男性は傲慢」な気がする。気がするだけなのだが、このようなステレオタイプを常に意識しながら生活している自分は否定できない。常にマイノリティーとしての視点から社会構造を見る環境を経験することで、カテゴリーに関する認知が偏見やステレオタイプに与える影響、またそれと相互作用する社会の構造について学び、より柔軟な社会をつくるための研究をしたいという思いを改めて強くしている。こういった理由で、たとえ居心地が悪くても、この居心地の悪さこそが自分の研究のために必要なのだと思っている。

次に、周囲の若手研究者のためになる。自分で書いていて大変おこがましく傲慢だと自覚しているのだが、怒りを抑えて読んでいただけたらと思う。研究生活において、周囲の人物から影響を受けることは少なからず誰にでもある経験だと思う。影響となり得るそれらの人々が、みな様な経験を積んでいるのでは、面白くない。私のような (i.e., サバイバル能力しかないような) 人間が海外の研究機関で挑戦できる事を周囲の研究者に知ってもらうことで、少し違った形の影響力になると考えている。これまで

何度も引用してきて、アイドルか、はたまた神かと思っていたような海外の一流研究者と一対一で議論をしたり、授業を受けたり、お茶やお酒を飲んだり、同じトイレを使ったり (!)、といった経験ができるなんて、私も海外に出てみるまでは想像もできなかった。しかし、それが現実となった今、研究を行う上での選択肢は多いということが分かった。研究に行き詰ったり、進路に迷ったり、研究室の人間関係に悩んだりしているときに、海外に出てみるという選択肢を考慮すると、途端に研究が楽しくなるのではないか。そう思ったらまず、周囲を見回して経験者を見つけ、話を聞いて欲しい。今後の選択肢の1つとして海外でのサバイバル生活を考慮する同志が増えたら、嬉しいのだ。

そして、社会心理学に対する見方が広がる。プリンストンに来て、社会心理と他の分野の関連、また社会への貢献について、考える機会が増えた。プリンストン大学の心理学科は、様々な分野との連携を重要視しており、心理学を専攻する院生は、哲学、経済、社会、政治、神経科学などの分野との joint degree を取得することが当たり前になっている。例えば、私にとって研究の関心である心理的本質主義という概念が、哲学の分野でどのように研究されているのかについて、哲学の先生や院生と議論する機会を得られたことは非常に大きい収穫である。また、政治政策の研究において、社会心理学の偏見研究の知見が取り入れられ、実際の政策に活かされていることも、ここに来て知った。今まで食べられないと思っていたキノコが実は身体に良いものだったりするわけである。未知の世界に足を踏み入れる冒険をすることで、一方向からではなく、多方向から自分の研究を捉える思考の柔軟性を手に入れられるのかもしれない。海外に出てみることで、社会心理学の研究の新たな可能性に気付くという収穫を得ることができる。

個人的な経験から大げさに述べ過ぎた気がするが、これを読んだ若手研究者が内に秘めた自身のサバイバル能力に気付き、未知の世界 (海外) に繰り出す決心をする一助になる情報となれば幸いである。最後に、現在のサバイバル生活をサポートしてくださっている日米教育委員会 (フルブライト奨学金) と日本の指導教員である唐沢穰先生にここで感謝を表したい。

(つかもとさおり・名古屋大学)

## 工学者からみた社会心理学

小川祐樹

私は、普段はデータマイニングや社会シミュレーションの研究を行っている工学寄りの研究者です。何故、工学系の方が社会心理学会の会報を? と感じるかと思いますが、数年前より社会心理学の先生との共同研究がきっかけで社会心理学研究の面白さに惹かれ、日本社会心理学会の会員になり、これまで何度か大会で発表させて頂きました。



もともと私は、学生時代には推薦システムの研究やマルチエージェントシミュレーションの研究を行っておりました。それが、

なぜ社会心理学の研究をし始めたかといいますと、博士課程の頃に参加した社会心理系の研究会に参加したことがきっかけでした。当時 SNS のデータ分析をしており、その研究について共同研究者の山本仁志先生が川浦康至先生の主催されている **Weblab Meeting** で発表されるのに参加したところ、出席されていた池田謙一先生から宮田加久子先生をご紹介頂きそこから共同研究がはじまりました。

研究を進めるうえで一番苦労したのが、社会心理系の関連理論の多さ、そしてそれらを体系づけて把握するのが非常に困難なことでした。研究テーマはソーシャルメディア上における熟議、具体的なテーマとして **Twitter** における沈黙の螺旋理論を扱っていましたが、先行研究を調査していくなかで、ある研究では理論を支持するけど別の研究では支持しなかったり、またその解釈として別の理論が出てきたり・・・と、一つの理論の知識だけでは到底収まらない研究議論の幅に圧倒されました。多数派同調という現象を扱うだけでも、マスメディア、選択的接触、態度変容などなど、調査を深めるたびに理解しておくべき関連理論がどんどんでてきて、これらを把握して理解するだけでも大変苦労しました（というか今もその一部分しか把握できていないのではないかという感覚があります）。

共同研究をはじめたころは、山本先生達と社会心理学の本を読み合い、関連文献の輪講会というレベルからはじめ、3年かかろうやく論文というかたちでまとめることができました。また、共同研究を進めるうえで指導してくださった宮田先生のご指導

とご配慮も大変大きく、社会心理の先生からみたら初歩的なことであっても詳細にご説明頂き、なかなか形にならない中でも継続的に議論させて頂けたことが大変勉強にもなり励みにもなりました。

これまでの研究は、どちらかという社会心理学の理論を援用してデータに基づいて現象を説明するというをやっており、これも一つの研究のかたちではあると思うのですが、将来的には現在やっている研究テーマについて「社会調査+行動データマイニング+社会シミュレーション」により、集団現象などの理解や予測、また制度設計に繋がりたいと考えています。工学寄りの人はシステムや制度の設計など比較的自由に語ったりしますが、社会心理学の方々は、現象を調査したり本質の部分をモデル化しようとはするのですが、それをを用いて制度設計をしようとか、制御しようとかそういう話にはすごく慎重なスタンスをとられるなというのは感じます。おそらくそれが真摯なスタンスだと思うのですが、一方で個人的には、お互いに議論しながら技術先行でないかたちでシステム設計について話せたらよりよいものができるのになあと思ったりもします。最近はこちらから出向いて行き、工学系であることを盾にして好き勝手言って社会心理学の人に叩かれる、といったかたちのスタンスで議論するのもありかなと思っております。

というわけで、もし学会や研究会で見かけた際は厳しめのコメント・ご意見を頂き議論できればうれしく思います。

(おがわゆうき・立正大学)

\*\*\*\*\*

## 役員選挙終わる

第28期役員選挙の結果、村田光二氏（一橋大学）が会長に再選されました。第28期から新たに就任することが決定した理事および監事は以下のとおりです（五十音順）。

- ◇ 全国区理事：五十嵐祐氏、池上知子氏、亀田達也氏、唐沢穰氏、工藤恵理子氏、高比良美詠子氏、吉澤寛之氏
- ◇ 地方区理事（北海道・東北地区）：堀毛一也氏
- ◇ 地方区理事（関東地区）：石黒格氏、大江朋子氏、渋谷明子氏
- ◇ 地方区理事（中部・近畿地区）：中谷内一也氏、長谷川孝治氏
- ◇ 地方区理事（中国・四国・九州・沖縄地区）：坂田桐子氏
- ◇ 監事：大山七穂氏

第28期の常任理事については、決定し次第メール・ニュースでお知らせし、選挙結果の詳細については会報の次号に掲載します。

\*\*\*\*\*

### ■会員異動

(2014年9月19日～12月10日)

#### 退会

川野 梓、三好 力、宗形奈津子

#### 自然退会

会津祥平、青木瑛佳、青木千帆子、秋山

豪、岩間菜都美、植田裕吾、海原有紀子、海老原由佳、大島健太郎、大畑由佳、風間美里、加藤美和、鐘ヶ江香菜、金子友紀、川口史佳、姜 恵慶、菊池文音、菊池 健、北 博之、儀武由紀子、キム ジュン、木村綱希、金城 亮、桑原和彦、

小出 悠、齋藤喜子、齋藤萌香、榊原友美、柴崎直人、清水侑子、習田明宏、正田智子、白山靖彦、須田和也、砂谷有里、曾 永宏、高橋京子、高山 緑、田中有理、中井裕規、中尾悠子、中島 涉、中西茂行、中村文彦、萩原俊彦、畠山彰文、

原 純輔、樊 琴、韓 若康、平川雄一郎、平山哲行、藤井慎二、古川みどり、外浦千加、朴 仙花、前田奈穂、萬関明子、三田村徳美、三宅邦建、森永今日子、山岸みどり、山田和樹、吉田正博、米田晃久、渡辺裕一、王 麗麗

#### 所属変更

亀田達也(東京大学大学院人文社会系研究科)、山岸俊男(一橋大学国際企業戦略研究科)、佐藤静香(東北大学高度教養教育・学生支援機構)、横溝 環(茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科)、栗田宣義(甲南大学文学部社会学科)、米谷 淳(神戸大学大学教育推進機構教授)、高橋 輝(アーバンリーガル行政書士事務所)、樋口 収(北海道教育大学教員養成開発連携センター准教授)、佐野美智子(跡見学園女子大学)、片岡由佳(福島県南相馬市立上真野小学校)、菊地雅子(Research, Data & Accountability Department, Harrison School District Two, Data Analyst)、西迫成一郎(相愛大学人文学部准教授)、菊島正浩(日本橋学館大学講師)、萩原 滋(立教女学院短期大学現代コミュニケーション学科特任教授)、有倉巳幸(鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター教授)、堀井康平(金沢医科大学学生保健室カウンセラールームカウンセラー)、斉藤慎一(東京女子大学現代教養学部人間科学科)、結城雅樹(北海道大学大学院文学研究科/社会科学実験研究センター教授)、吉田琢哉(岐阜聖徳学園大学准教授)、藤 桂(筑波大学人間系心理学域助教)、松村暢彦(愛媛大学大学院理工学研究科教授)、篠田潤子(UP-FRONT GROUP)、高橋 均(広島女学院大学)、呉 正培(尚絅学院大学総合人間科学部現代社会学科講師)、王 戈((独)科学技術振興機構)、山崎真理子(静岡県立大学経営情報学部経営情報学科講師)、下田俊介(東洋大学人間科学総合研究所奨励研究員)、菅 忍((株)

西田技術開発コンサルタント技師長)、藤原 勇(立命館大学 非常勤講師)、奥津真里(特定非営利活動法人 JKSK 監事)、森田尚人((一財)運輸調査局調査研究センター)、新井田 統(KDDI 研究所 ヒューマンセンタードデザインプロジェクト開発マネージャー)、川嶋伸佳(京都文教大学総合社会学部特任講師)、萩原 遥(医療法人山口病院(川越))、綿村英一郎(東京大学大学院人文社会系研究科助教)、縄田健悟(九州大学持続可能な社会のための決断科学センター)、佐々木香織(GfK カスタムリサーチ・ジャパン(株))、李 楊(玉川大学脳科学研究所嘱託研究員)、池田琴恵(東京福祉大学社会福祉学部保育児童学科助教)、山本真菜(日本大学人文科学研究所研究員)、吉武久美(人間環境大学講師)、宇佐美尋子(聖徳大学心理・福祉学部講師)、志茂田 誠(東京福祉大学、国立駿河療養所、(株)AR 心理研究所)、魚野翔太(京都大学大学院医学研究科特定助教)、藤枝静暁(埼玉学園大学大学院心理学研究科)、永井聖剛(愛知淑徳大学人間情報学部准教授)、古屋 真(駒沢女子短期大学講師)

#### 『社会心理学研究』掲載予定論文

■第30巻第2号(2014年12月刊行予定)  
《原著》

高田琢弘・湯川進太郎「勝敗、感情状態、運の知覚がギャンブル行動の無謀さ・手堅さに及ぼす影響」

■第30巻第3号(2015年3月刊行予定)  
《原著》

中川裕美・横田晋大・中西大輔「実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討: 広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験」

宮崎弦太・池上知子「被拒絶場面での関係修復行動の促進要因としてのコミットメントと受容期待: 媒介過程の差異と愛

着傾向による調整過程」

《資料》

尾崎 拓・中谷内一也「記述的規範と他者との相互作用が地震防災行動に及ぼす影響」

《モノグラフ》

大坪庸介「仲直りの進化社会心理学: 価値ある関係仮説とコストのかかる謝罪」  
村本由紀子・遠藤由美「答志島寝屋慣行の維持と変容: 社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー」

#### 編集後記

2014年の「流行語大賞」は「ダメよ〜ダメダメ」でした。その報道に接して初めてその言葉を知った私は「ここまで自分が世間の流行からずれる時がきたか」と自分のダメさ加減を慨嘆したものです。たいていの知らないことは「ググって」解決するのですが、この言葉ばかりはそのニュアンスを敢えて知らずに「自分にダメ出しをしてくれる天の声」だと思い込むことにしました。いや、天より大切なのは周囲の人々の声なのですが、ともかく、人生にせよ研究にせよただ闇雲に突き進むだけでは知らず知らずにいろいろなものを失うかもしれないな、と痛感したこの1年でした。寒さ厳しき折ではありますが、どうか皆様良いお年を。(asarin)

#### メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: [jssp-post@bunken.co.jp](mailto:jssp-post@bunken.co.jp)

掲載料: 1件(1回あたり)1,000円(後日事務局より請求書をお送りします。)